

健診に携わる言語聴覚士の実践報告
～健診およびフォロー教室での実際～

岩崎早希

乳幼児健診の在り方や関わる職種は自治体によって異なります。言語聴覚士は必須職種ではありませんが、保護者の不安や心配と向き合い、育てにくさを軽減し楽しく育児ができるよう、コミュニケーションの専門家である言語聴覚士が健診事業に参画する意義は非常に大きいと考えます。

R 市では、2022 年度から言語聴覚士が 1 歳 6 か月健診に参加し、希望する保護者の個別相談を受けるようになりました。健診に参入する前には保健師対象に健診における言語聴覚士の役割を伝えるとともに、1 歳 6 か月健診を充実させるための言語聴覚士としての視点を共有しました。1 歳 6 か月健診にはことばについての質問項目があり、また乳幼児期から保育所等を利用する子どもも多いことから、「ことばが遅い子」の保護者は不安になりやすいですが、一方で発達の個人差が大きい時期でもあり、「今ことばが遅い子」がその後心配がなくなるのか何か背景があつてことばが遅いのか、健診の一時点で見極めることは非常に困難です。そのため、言語聴覚士はことばの専門家として、保護者の不安な気持ちを受け止めるとともに、生活の中で保護者自身ができそうなことを一緒に考え提案していくことが求められます。抽象的なアドバイスではなく、子どもとのかかわり方をオーダーメイドで具体的に提案するために、健診場面でどのようにアセスメントし保護者との話をしているか、具体例を挙げながら当日はお話したいと思います。

また I 市では、5 歳児健診の事後相談ならびにその後のフォロー教室に携わっています。I 市では巡回型の 5 歳児健診が年中の秋に実施されるので、事後相談およびフォロー教室で会うのはまもなく年長になる頃となります。事後相談後にフォロー教室に繋がった保護者の方も、心配事を自分から話せる方ばかりではありません。実際に子どもの様子を観察したり会話したりする中での気づきを丁寧に伝えることで心の内を伝えてくださるようになる方が多い印象です。具体的な場面をあげながら保護者の話を引き出し、就学に向けて取り組みたいことを共有します。どうしても子どもの気になるところに注目しがちですが、子どもの「素敵ところ」を共有し、子どもが「頑張っているところ」を具体的に「応援する方法」を共有することを大切にしています。子どもにも保護者にも「来てよかった」「また来たい」と思いながら笑顔で帰途についていただけるよう心がけています。当日は、フォロー教室での子どもや保護者との関わりおよび助言や支援の例をお話しする予定です。

言語聴覚士だからこそできる、子どもたちの成長や子育ての応援の仕方を考える機会にいただけると嬉しいです。